令和六年三月一日発行　毎月一回一日発行

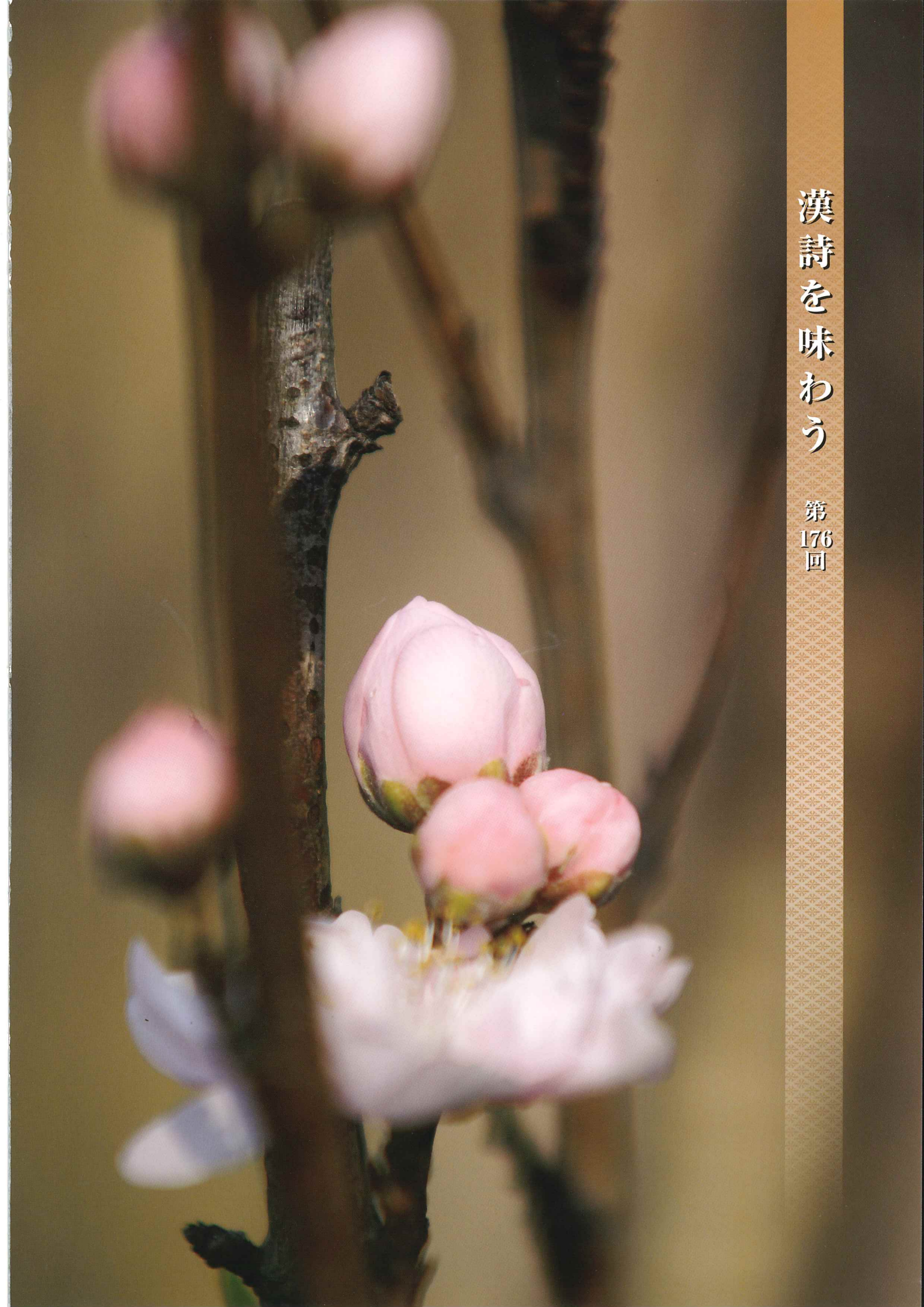
書道研究誌

書の光

3
2024

Vol.667

宮城野書道会



漢詩を味わう

第176回

西施石　　楼穎

西施昔日浣紗津　　西施　昔日　浣紗の津
石上青苔思殺人　　石上の青苔　人を思殺す
一去姑蘇不復返　　一たび姑蘇に去って　復た返らず
岸旁桃李為誰春　　岸旁の桃李　誰が為にか春なる

西施がかつて紗を洗っていた渡し場のあたり、紗を広げていた石の上の青い苔は、見るものに昔を偲び、悩ましい思いにさせる。
西施は姑蘇へ去ったきり、とうとう再びここに帰ることはなかった。
主のいない岸辺の桃や李は相変わらず花が咲き揃っているが、いったい誰のために美しい春の花を咲かせているのだろうか。

《西施石》西施が紗を広げていた石。
《浣紗の津》紗を洗っていた川の渡し場。
《思殺》殺は程度の激しさをあらわす。
《姑蘇》姑蘇台。呉王夫差の宮殿のあったところ。江蘇省呉県。

春秋時代の西施は先月掲載した漢代の王昭君とともに、中国の古代四大美女の一人に数えられています。唐時代の楊貴妃はとく有名ですが、貂蟬は三国志演義に登場する架空の存在ですので、西施・王昭君・楊貴妃三人が三大美女と言って良いようです。
作者の楼穎は唐時代天平年間の進士ですが、伝記は残っておらず、この一首だけが知られています。
この詩は楼穎が西施の故地、会稽の苧羅山中の谷川を訪ねて詠んだ詩です。かつて西施はこの川でうすぎぬを洗っていたときに、越王句践の名参謀范蠡に見初められ、呉王夫差に策略として献上されます。その絶世の美貌をもって呉王夫差を骨抜きにして、越の勝利のために大きな役割を演じたと伝えられます。西施伝説は民間に伝承され、戯曲などが続々と作られ脚色されるようになります。なかには范蠡と恋仲になって、呉が滅亡したのちに駆け落ちして大商人となった范蠡とともに幸せに暮らしたという話もあります（唐陸廣微『呉地記』）。しかし残念ながら大半の伝記は、呉滅亡後に自殺、或いは殺されたという悲劇的な結末です。
王昭君も政治の犠牲となりその一生は悲惨な末路でしたが、楊貴妃も傾国の美女と言われて処刑されています。美貌のために、男性社会だった政治の舞台に招き入れられ悲惨な末路を辿った美女たちは、詩人達によって多くの詩に詠まれ、西施の悲劇は古くから日本にも伝わります。
松尾芭蕉は秋田県象潟を訪れた時、その美しい景色と雨に濡れる合歓の花を「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠んでいます。

参考文献：唐詩選（平凡社）・漢詩の事典（大修館書店）

天下心を傷ましむるの處　労労客を送るの亭　春風別れの苦なるを知り　柳條をして青からしめず

《大意》国中の心をかなしませる処は、労労となってなごりを惜しんで旅人を送るこの亭だ。春風も別れのつらさをしっているのか、柳の枝を青くさせない。（李白詩・労労亭）※送別の際に柳の枝を折って送る風習「折楊柳」をさせないこと。

寒辞し冬雪去り　暖帯びて春風に入る

《大意》寒気は消滅して冬の雪を除き去り、暖気が入り春風がふく。（無名氏）

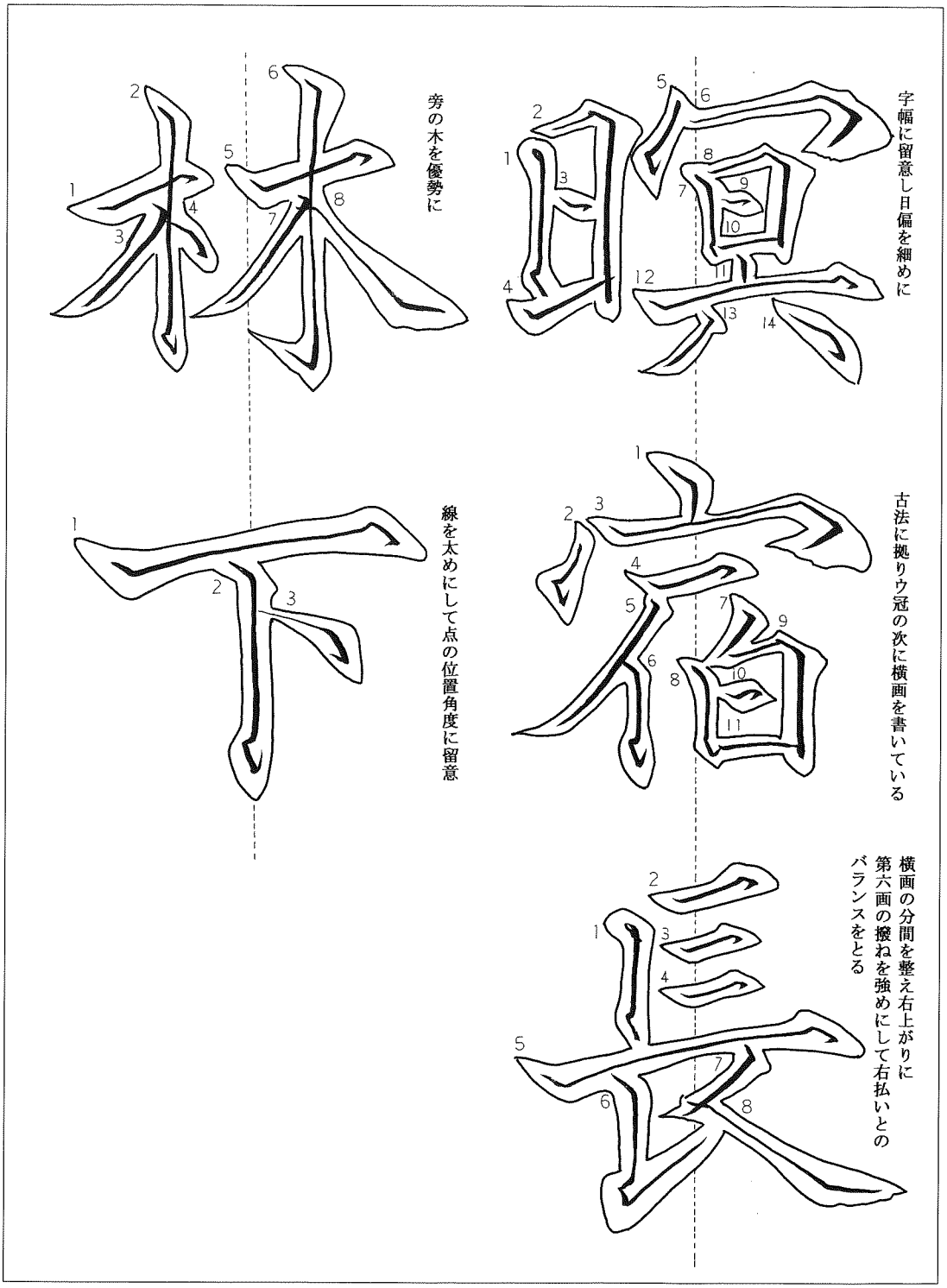
暝宿長林下

読み　暝（くれ）に宿る　長林の下（もと）（日暮れに広い林のほとりに泊まり）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。



連月課題

王維詩「藍田山の石門精舎」（後半）

朝梵林未曙
朝梵　林　未だ曙けず

夜禪山更寂
夜禪　山　更に寂たり

道心及牧童
道心　牧童に及び

世事問樵客
世事　樵客に問ふ

暝宿長林下
暝に宿る　長林の下

焚香臥瑤席
香を焚きて　瑤席に臥す

澗芳襲人衣
澗芳　人衣を　襲ひ

山月映石壁
山月　石壁に映ず

再尋畏迷誤
再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歴
明發　更に登歴せん

笑謝桃源人
笑ひて謝す　桃源の人

花紅復來覿
花の紅なるとき　復た來りて覿はん

行書

草書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

隷書

次号課題

香を焚きて瑶席に臥す

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

ペン字部課題　（3月30日〆切）　細字部課題　（3月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　シャクフンリゾク　ヘイカイカミョウ

略解　紛争を解いて世人に利することを任務とした人と芸術にすぐれ佳妙の境に入った人たち

支部	順位	氏名

目かくしをとしのばいな
雛の笑顔かな

市原多代女

和泉溪石先生書

上は則ち峻に縣かり、屈曲して……

■石門頌（せきもんしょう）（後漢・西暦一四八年）の臨書 (12)

象雲臨

『上則縣峻屈曲』

石門頌は陝西省褒斜の渓谷にある巌壁に刻した摩崖刻石です。八分隷の全盛期の作品で、同時代の石刻と比べると厳格さや典雅といった気風に欠けますが、線條が極めて細いために暢びやかで、古雅深趣という言葉で評価されていることは以前から述べているとおりです。

さてそれでは古拙美とも表現される飄々とした味わいはどこから来るのでしょうか。

まず横画の分間が明瞭で、横拡がりの結体で統一されて、八分隷の格といったものがきちんと備わっています。一方で不自然さを感じませんが、横線の傾き具合が様々で、一字一字は正対する字と重心を左右に傾ける字が混在しています。このことにより字同士が響き合い助け合っているかのようです。また波磔は敢えて太くせず、思い切って長く伸ばした字が多く、重厚感や規則性といった他の八分隷の持ち味との差別化を図っているように見て取れます。

変化と統一はどの書体でも書の美の大きな要因です。慣れてしまえば整えて書くことは容易ですが、変化を加えて書くという難しい課題を古典臨書から学んでいきたいものです。

智通無累

智は無累に通じ

■王羲之・集字聖教序（唐・西暦六七二年）の臨書 (26)

象雲臨

『智通無累』

今月の四文字は、行書体の「智・無」に楷書体の「累」と草書体の通が混在しています。さらに大小や線の強弱や硬さなどもバランスがとれておらず、筆勢も緩急も不統一です。王羲之の集字のため、これが当たり前ですが、臨書はこの点に特に留意して字に生命を吹き込んでください。

「智」上部の左右は空間を広くして、日はやや右下に。

「通」何度か登場する字だが、シンニュウの処理が難しい。緩急と太細を加味して動きを加えたい。

「無」線が途切れて単調な結体に見えるが、やや重心を左下に傾けて字に勢いを。

「累」全く楷書といっていい結体だが、糸の中心は田と揃えずに右に移動させて、最後の左右二点も気脈を加える。